

〔書評〕

## 萬田務著 『心の棲み家 昭和の作家群像』

野村 幸一郎

宮沢賢治研究の第一人者として知られる著者が、これまでに発表した昭和期の作家・作品についての論考を一冊にまとめたのが本書である。宮沢賢治についての論考ももちろん含まれているが、大部分はむしろ賢治と同時代の、あるいは賢治以降の作家や作品についての論考によって占められている。

私は本書を、著者の文学遍歴の書として大変興味深く読んだ。宮沢賢治研究者である著者が賢治を理解するためにむしろそこからいったん離れていかなければならなかった。あるいは賢治を起点として関心が網目状に四方八方に広がっていく、本書にはそのような文学探求のドラマが繰り広げられている。

このような本書の性格は、統一性の欠落というネガティブな評価を招くものではない。後に詳しく紹介していくつもりであるが、いずれの論考もいくつかのきわめて自覚的な問題意識の下に執筆されたものである。近代文学研究に携わる者の一人として私は、本書を通じて著者の文学探求の跡をたどることができ、深く共感

するとともに、新たな研究対象に果敢に取り組む探求心の旺盛さを舌を巻く思いがした。

そして、本書を通じて示された、放射状に広がる著者の文学への関心は何よりも研究者としての誠実さの証であると、私は強く感じる。結果しか手にできない意識は、ものごとの秩序を転倒し、結果と原因を取り替えていくという誤謬を犯す。言い換えるならば、ある統一的な作家像（原因）をまずイメージし、それを補完するような言説（結果）を並べつつも、考察の結果このような作家像が出てきましたという形で論を展開する。文学作品に向かう姿勢を不自然に一元化し安易に統一的な作家像を導き出すような姿勢には、原因と結果を転倒していくごまかしが潜在している。作家という実体はただひとつであっても、その作家が持つ属性は無限である。とするならば、ある作家を考えていくことで文学への関心が放射状に広がってしまうことこそ、むしろ、あるべき姿ではないだろうか。著者の誠実さは、たったひとつの（しかも転

倒した)因果関係で研究対象をすべてかたづけしてしまうようなまかしを峻拒している、私にはそのように思えてならない。まずは本書の章立てを概観しておきたい。

川端康成 『古都』

梶井基次郎 闇の発生をめぐって

梶井基次郎 『蠅』

中島敦の自我について

丹羽文雄と宗教

野間宏と宗教

三島由紀夫 『橋づくし』

吉行淳之介 〈性〉に関するノート

石原慎太郎 『太陽の季節』

梶山季之 生い立ちの文学

真継伸彦と宗教

安部昭 『司令の休暇』

秦恒平 『廬山』

後藤みな子 『刻を引く』

竹久夢二 『桜さく嶋 春のかたはれ』『昼夜帯』『三味線草』

宮沢賢治 人と文学

賢治詩の魅力 「永訣の朝」を例として

三好達治 『測量船』『花筐』

安西冬衛 『琵琶海峡と蝶』を中心に

佐藤佐太郎 『歩道』の新しさ

坪田譲治 『河童の話』

壺井栄 我が裡なる『暦』

壺井栄 『母のない子と子のない母と』

石井桃子 『ノンちゃん雲に乗る』を中心に

松谷みよ子 〈混乱〉のベクトルからの転回

海外における「私小説」研究

あとがきにおいて著者は、「内容的にもひとつのテーマのもとに書かれたものでもなければ、また、確とした研究方法に貫かれているわけでもない」と断つてはいるが、本書は、まったく関係性をもたない論考が、単に集められているわけではない。いくつかの明確な問題意識のもとにこれらの論考は執筆されている。

たとえば、冒頭に収められている「川端康成 『古都』」や「梶井基次郎 闇の発生をめぐって」からは、〈文学と風土〉の問題に対する著者の関心の程を伺うことができる。あとがきにおいても、賢治と岩手の風土とのかわりを考える上で、伊豆・湯ヶ島と梶井文学を対置するという構想があったことが述べられている。「川端康成 『古都』」では、敗戦体験をきっかけとした川端の自然／古典回帰が『古都』においては、生命と孤独、人間と自然、伝統社会と現代社会といった、二元論的対立となって結実している」と論じられている。また、「梶井基次郎 闇の発生をめぐって」では、梶井文学の主題と言われる「闇と光」(福永武彦)

の成立の起源のひとつが、彼の湯ヶ島体験にあったことが立証されている。『冬の日』が当初の構想では向目的な結末を予定していたのは、湯ヶ島に療養に来るまでは生命回復への希望があったからである。しかし、血痰の見るまでに病状が進んだ結果、『冬の日』は当初の構想と大きくかけはなれたものとなり、その過程で梶井は自身の青春の彷徨に終止符を打つことになったと指摘されている。「私は長い間ある山間の療養地に暮らしてゐた。私は其処で闇を愛することを覚えた」（『闇の絵巻』）という梶井の言葉は、このような経緯を暗示している。梶井の言葉はさらに「かうした発見は都会から不意に山間へ行つたものの闇を知る第一段階である」と続く。都会が光にすらなり、生の回復をもたらさずだった山間（湯ヶ島）と闇（死・恐怖・不安）が感覚のレヴェルで融け合っていく感性の転倒の位相が、この論考では浮き彫りにされている。著者の立証の手續きはきわめて周到であり、充分な説得力を持つ。

「梶井基次郎『蠅』」「中島敦の自我について」では（日本近代の知識人の系譜）に対する著者の関心が示されている。梶井の『蠅』については、暗い実人生に対してどうすることもできない近代知識人の疲労・倦怠に作品のテーマがあったと論じられている。その上で、そこから脱出すべく努力しなかったところに、梶井文学の限界点が指摘されている。また、「中島敦の自我について」では、「形而上的不安」から逃れることができないことを自覚した中島に唯一残された方法は、その不安を執拗に追求するこ

とであつたと論じられている。それによつてのみ「形而上的不安」から脱出することができると中島は悟つたのであり、ここに彼の文学的営為の本質があつたと結論づけられている。

「丹羽文雄と宗教」「野間宏と宗教」「真継伸彦と宗教」「宮沢賢治 人と作品」はいずれも、〈文学と宗教〉という問題意識のもとに執筆されたものである。「丹羽文雄と宗教」において著者は、浄土真宗の住職の長男として生れながら家出をした丹羽の生い立ちに着目している。丹羽にとつて家出は救いを自ら拒む背教行為であつた。ここに人間を〈赦されざるもの〉（呪われたるもの）として捉えようとする丹羽の人間認識の起源を著者は指摘している。「野間宏と宗教」では、親鸞を信奉する在家宗教一派の教組であつた父の影響下よりいかに脱出するかが野間の人生的課題であつたことを前提として、野間の精神史の俯瞰が試みられている。「真継伸彦と宗教」では、リルケの『マルテの日記』を死の恐怖を突破した彼方に生の肯定を見出だそうとする精神の闘争の書として受容したことが、真継の宗教的開眼の契機となつたことが指摘されている。その上で、自己の存在の意味を問うていく中で真継が仏教に接近していく過程が跡づけられている。「宮沢賢治 人と作品」では、熱心な浄土真宗信者であつた父の影響や法華経への開眼などの宗教体験、自然科学体験、そして東北の自然や風土、これら三者が渾然一体となり、内部宇宙を形造つていたところに賢治作品の本質が求められている。

「賢治詩の魅力」「永訣の朝」を例として」「三好達治』測

量船』『花筐』『安西冬衛 『韃靼海峽と蝶』を中心に」は、賢治および同時代の詩についての論考である。とくに私は「賢治詩の魅力」「永訣の朝」を例として」を興味深く読んだ。この論考では、「永訣の朝」の中の「(Ora Orade Shitori eguno)」の一句について、鋭い分析が展開されている。「(Ora Orade Shitori eguno)」(推敲前は「おらおらでしとり行くも」とは、死を目の前にした妹トシ子が賢治に向かって、自分の信じる道(キリスト教)をたった一人で行くと言ったことを意味している、賢治は自分が信じる法華経への訣別をトシ子から告げられたと結論づけられている。「三好達治 『測量船』『花筐』」では、青春の悲哀、近代人の孤独、悲哀というモチーフを叙情の実験を通して表現したところに達治の独自性が指摘されている。「安西冬衛 『韃靼海峽と蝶』を中心に」では、安西冬衛自身の意匠でもあった「仮設の美」、「蝶の美学」についての分析が試みられている。「吉行淳之介 〈性〉に関するノート」は「文学と性」の問題をあつかった論考である。あとがきにおいて著者は、宮沢賢治の研究の過程で近代知識人の系譜に関心が向かい、さらに漱石文学と性の問題、文学と性の問題に関心が広がっていったと述べている。この論考では吉行文学における性の問題が、人間性回復のための性の充足が最終的にその喪失に導いていく背離の過程として捉えられている。戦時下において死に直面した吉行は人間性の回復のために性の充足を求めた。しかし、死の危機は去り快楽のみ

の性を追求するようになった結果、最終的には人間性回復の姿勢が崩れ複雑なセックスの形態に陥っていったと、著者は論じている。

さて、ここで今一度、本書のあとがきに眼を転じてみたい。

私なりにこだわったのは、時代とのかかわりを重視することであった。対象とした作家の何人かと時間を共有した自分にとって、それは己れを問い直す作業であったし、今後もお引き摺っていくことになると思う。書名を「心の棲み家」としたのも、そんな意味もこめられている。

時代を共有した作家を考えることを通じて自分自身を問い直すこと、「心の棲み家」という本書のタイトルの由来が、このように語られている。

たしかに本書では、戦時下の生活や戦争の悲惨さを描きだした児童文学や、敗戦直後の日本に生きた人間をテーマにした作品が多く取り上げられている。「壺井栄 『母のない子と子のない母と』」「石井桃子 『ノンちゃん雲に乗る』を中心に」「松谷みよ子 〈混乱〉のベクトルからの転回」、あるいは「阿部昭 『司令の休暇』」「後藤みな子 『刻を引く』」がそれである。これらの論考が、自分自身を見直す過程で執筆されたものなのであるうか。そうであるとするなら本書は、自らの存在の原点を再確認していくことが目指された、著者の精神史でもあることになろう。紙面に余裕がないため個々の論考に言及することは控えるが、これらの論考を通して私がつとも痛感したのは、戦争あるいは

敗戦という出来事に対する著者のこだわりであった。

著者の「心の棲み家」を垣間見るとき、私たちは、自らの原点に立ち返ることの〈重み〉、その場所で獲得された固有の論理と表現の〈重み〉に気づかされるのではないだろうか。

(双文社出版 一九九八年八月 二六一頁 二四〇〇円)

(のむら・こういちろう 大阪青山短期大学専任講師)